

児童健全育成賞（数納賞）佳作

児童館を拠点とした乳幼児親子支援から「おやこふらっとひろば」への展開

—日本版ネウボラを目指して—

兵庫県神戸市

神戸市立六甲道児童館 児童館職員(児童厚生員) 八木千波

はじめに

本稿では、NPO法人S-spaceが神戸市立六甲道児童館と「おやこふらっとひろば灘」で行っている、子育て支援の実践を取り上げる。

六甲道児童館では母親や妊婦を支える子育て支援に取り組み、それが他の児童館にも広がった。その後、神戸市灘区の「おやこふらっとひろば灘」という子育て支援施設の運営を受託するが、そこでも児童館での取り組みを生かしている。これらの取り組みとその意義について紹介していきたい。

また、2020年4月1日に開所予定だった「おやこふらっとひろば灘」は、コロナ禍で開所が6月1日に延期され、その後も困難な状況の中での子育て支援に向き合うこととなった。その様子も、あわせて紹介したい。

母親の自殺、乳幼児虐待を防ぐための子育て支援

日本において、出産後1年以内に亡くなる母親の死亡理由1位は、2位を大きく引き離し、出血でも癌でもなく、自殺である。これに大きく関与しているであろうと言われる、産後鬱は7～10人に1人が発症するという統計があり、産後6か月、3か月、4か月の順に多い。このことを世間が理解しなければ、母親を亡くし大人になった子どもは、自分は捨てられたと自暴自棄になり、悪循環に陥ることもある。

また虐待も深刻な問題である。現在も、乳幼児虐待が急増しており、私たちは誰でも一歩間違えば、虐待と隣り合わせである。そして、厚労省発表の2019年度子ども虐待死の半数が0歳児、加害者は母親が最も多くなっている。

このような事態をどう受け止め、支援していけばいいのか知りたいと、私は心理学の勉強をし、カウンセラーとSNSカウンセラーの資格取得をした。その授業の中で精神科の先生は、1日に60人も診ておられ、それでも数か月診察を待っている患者さんがいることを述べられた。また私も相談してくれた母親から、乳幼児の発達相談で半年待っているという話を聞いたことがある。心の病にかかってからでは治癒が長引くこと、早期発見と予防の大切さが母親支援のカギを握っていることを強く感じた。

私自身もハンデのある2人の子育てに迷い、悩み、まさか自分が、と思っていた虐待と、隣り合わせになった経験がある。そんなとき、行政や地域、周囲の人間関係に助けられた経緯があり、社会に恩返ししたいと、子育て支援の現場に立ち続けている。

NPO法人S-spaceとの出会い

私は地元大阪で幼稚園教諭、保育士として勤務後、自分の子育てを経て、神戸に引っ越した際、神戸市灘区に拠点を置くNPO法人S-spaceと出会い、2013年から正規職員となり、S-space

が指定管理者として運営する神戸市立六甲道児童館に勤務するようになった。

法人の考え方は、子どもたちや、その子どもを見守る大人が様々な実体験を通じて、自分のペース「Self pace」で過ごせる場所「Space」づくりに取り組むことである。

この考え方を、子育て支援に活かし、母親一人ひとりが自分のペースで子どもに向き合うことが出来るように寄り添うことや、安心して過ごせる居場所を作ることが私の役割となっていた。

神戸市の児童館における乳幼児親子支援

神戸市は児童館の数が、政令指定都市の中で第2位である。またJR六甲道駅近隣は大阪・神戸のベッドタウンとして人口や子どもの数も増えている。

2013年に神戸市立六甲道児童館に着任した際に、ここは子育て支援がしやすい児童館だとまず感じた。JR駅に直結したビルの4階にあり、改札を出てすぐベビーカーが数台乗れるエレベーターが3基あり、2階3階はスーパーである。

児童館はワンフロアで階段がなく広々として、特に妊婦から生まれたての赤ちゃん、乳幼児が劇的に過ごしやすい環境だ。この環境を生かして子育て支援の取り組みが出来る事は、私の大きな原動力となった。

登録制クラブを母親同士が安心できる交流の場にする

神戸市では全児童館に2・3歳児の登録制親子クラブがあり、プログラム実施、母親交流、育児の学びを行い、相談も受け付けている。

登録制クラブの弱みは、母親が我が子を他の子と比べ、不安になることで、それを傾聴と声かけで強みに変えるのが私たちの役目である。

初めての集団活動で、子どもたちの反応は様々だ。走り回るなど落ち着きのない行動をする子、母親にべったりで離れない子、泣いてばかりの子、集団が苦手で出て行ってしまう子もいる。

このプログラム実施中から私は心の眼を光らせて、母親の困り感に気づくアンテナを張っている。常に意識していることは、まず困っている人に気付く事だ。気付いたらすぐに不安の火を消すために行動する。

プログラムが終わった後の自由遊びの時間に、私はさりげなく、気付いた母親の子どもと遊ぶようにしている。まずは母親ではなく子どもと関わり、我が子を一緒に見守ってくれているという安心感をもってもらう。するとほとんど母親の方から「うちの子はじっとできない。泣いてばかりだ。こんなんでもいいんですかね……」と不安を話し始めてくれる。しっかり傾聴し「みんな違ってそれでいいですよ。少しずつ成長していきますから、一緒に見ていきましょう。何か気になるときは、遠慮せずすぐにお伝えくださいね。その時々で、対策を一緒に考えていきましょう」と伝えて安心してもらう。これが信頼関係作りの第一歩だ。子どもの状況は変わらなくても、母親の心の状態を変えることは出来る。

また、同じ悩みを持つ方を繋げて、しんどさを共有してもらうことも意識している。仲間ができる少しづつ母親の顔が明るくなっていく。例えば「私もあるよ。うちの子も手が付けられなくて、腹が立って手が出てしまいそうになることがあるよ」「そうそう、あるある」という雑談や、井戸端会議は非常に重要で、私だけではないという安心感は、それらの時間に得られるのだ。

また、安心だけでは終わらず、今度はポジティブアプローチに繋げる為、親子クラブのプログラムにおいても年に2回、母子分離をして、母親同士で子どもへの声掛けの仕方や、ほめ方叱り方を学び、話しあいをする機会を持っている。毎回「貴重な時間だった」「子どもとの関わり方の参考になった」とのアンケート結果が得られ、母親の心的負担軽減効果があることがうかがえた。

もちろん母親からの相談内容によっては関係機関や専門家につなぐこともある。ただ基本的

に母親は、弱音を吐いたり、それに対して共感を得たり、仲間と辛さを分かち合うことで、その後リラックスして子どもと関わっている。その様子から、職員との信頼関係、母親同士の交流には、心の病を未然に防ぐ効果があるのではないかと考えている。こうした持続した交流の場を作れるのが、児童館の登録制クラブの強みだ。

クラブ卒業後ママと児童館の繋がり —利用者OGママボランティア

登録制クラブの課題としては、参加する際に、下の子（赤ちゃん）がいることで、入会を躊躇される方が多かった点が挙げられる。

そこで2014年に託児ボランティアを、登録制クラブの元利用者のOGママに依頼した。下の子をボランティアが預かることで、利用者の母親は上の子としっかり関わる時間が持て、上の子も母親とゆったり過ごすことで落ち着いていく。また、クラブ終了後は、下の子がどんな様子だったかボランティアの方から報告を受けることがきっかけで、ボランティアと利用者の母親が、同じ子育てママだからこそ話せるちょっとした悩みを打ち明け合う相談タイムとなる。ボランティアであるOGママにも、先輩ママとしての自己肯定感を持ってもらえるようになった。

ボランティア活動の後、OGママ達はランチに行き、我が子の幼稚園での悩みを話し合うなど、児童館を通じた切れ目のない母親交流が続き、この取り組みは、現在にいたるまで温かく引き継がれている。

OGママの中には、自分が子育てに悩んだ経験から、保育士になろうと決断され、ボランティアをしながら2年かけて通信で、保育士資格を取得された方もいる。2021年の今年も同じ道を目指す挑戦者がいるので、元保育士の私も実技などに関してアドバイスし、応援している。

私が常に意識しているのは、誰のために、どのような目的と狙いを持ってそれを行い、どのような結果が得られたかを検証し、より有意義な

支援をする事である。OGママボランティア活動は、自己肯定感、児童館との切れ目ない繋がりがりだけではなく、社会復帰に向けての練習期間となる事も目的としていたが、新しい道を目指して資格取得に取り組むという、想定外の発展が見られたことは驚きでもあり、志をしっかりと持った保育士が地域に増える、それを児童館から送り出せるということは、この取り組みの新たな意義を見出すことが出来たと感じている。

児童館デビューへのハードルを 下げるアプローチ

私が正規職員として着任した2013年頃、「児童館って、10ヶ月の赤ちゃんを連れて行っているんですか？」との電話問い合わせを皮切りに、年々「8ヶ月ですが……」「6か月ですが……」と月齢が下がっていった。0歳からの施設と書いていても、自分の子どもがそれに該当する自信が無く、児童館の利用を躊躇してしまうようだ。

六甲道児童館のように、エレベーターもあり、乳児親子にとっては来やすい条件でも「どうしてもエレベーターの4階を押す勇気が出なかった」と話す母親は多い。孤独な育児の中、赤ちゃんを連れて、初めての場所に1人で行く。その最初の一步には勇気が必要なのだ。

また、2013年から2015年にかけて、この立地の中での乳児の母親の求めることは何なのか知るために、アンケートを取ってみたところ、同じくらいの月齢の赤ちゃんとの交流を求める声が多かった。

そこで、2016年より、具体的に月齢を分け、「2か月から7か月」「8か月から12か月のあかちゃんのおへや」という名前をつけ、日時を決め、プログラム化し、ポスターで告知した。すると、口コミで広がっていった。「誰でも来ていい」という伝え方では、誰もが来にくかったのだ。

「あかちゃんのおへや」では、赤ちゃん体操や触れ合い遊び、おしゃべりタイム等を実施した。また、お弁当タイムを設け（現在はコロナ

禍により中止)、就労支援施設B型の弁当屋に配達をお願いすると、注文するママが多かった。ランチタイムで、さらに交流を深め、そのまま午後も児童館に長時間滞在してくれる方が増えていった。弁当屋は就労支援施設なので、配達の方が不愛想だったり、動作がぎこちなかったりするが、事前に母親に事情を伝えることで、安心して利用して頂けるように配慮した。この就労支援施設をお願いしたことには、意味がある。

来館者の中にはダウン症の子を持つ親もいた。そのお母さんが以前、「いつかこの子が大人になった時に働ける場所があったらいいな」と言っていた。この言葉が頭に残っており、地域の障がい者就労支援が赤ちゃん来館増加とともにあることに、強い意義を感じるのである。

そして、ランチタイムも含めた「あかちゃんのおへや」を実施した時の写真入りチラシ掲示、SNSで発信することにより、目で見てどんな様子かわかるので、来館に対するハードルを下げる事ができた。

初回は学童室で10組実施だったのが、4回目には20組となり、急遽広いプレイルームに移動、それ以降多い時は30組60名、児童館の広いプレイルームでの実施でも狭く感じるようになった。ランチタイムも10組程度から始まり、その後20組と増えていった。

児童館の外の地域資源に目を向ける

次に、子育てを楽しむということ 키워ードに、児童館の外の地域資源にも目を向けた。赤ちゃんがいる母親は、なかなか美容室に行けない。そんな中、保育士がいて、母親がカットしている間に赤ちゃんを預かり、なおかつ、その保育士は、今流行りの「寝相アート」のバックを作って、Instagram映えする写真を撮ってくれる美容室が、地域にあったのだ。

寝相アートとは、あらかじめ、フェルトを使って、季節の壁面のようなものを手作りし、床に敷き、赤ちゃんがその上に寝ころぶと、あたかも作品のようにインスタ映えする写真が撮れる

のである。早速、美容室に問い合わせ、保育士の方、オーナーの方に、児童館でこの「寝相アート」をやってくれないか打診をしてみた。そうすれば来館者にも、保育士がいて、赤ちゃんを預かってもらって、ゆっくり出来る美容室があることも知ってもらえる。すると快く引き受けて下さり、「赤ちゃん寝相アートIN児童館」が実現したのである。子育てに優しい地域の美容室と癒されたいママを繋ぐという目的がかない、初回20組参加がどんどん増えて、30組以上のときもあった。

出産後すぐに居場所があることを知らせる「プレママ・パパセミナー」

あるとき、来館者の母親から、「もっと早く児童館の存在を知っていればよかった、こんなに居心地のいい場所を、知らずにもったいなかった。出産後1年間は鬱状態で、外にも出れず、どこに行けばいいかもわからなかった。朝起きても寝不足で、着替える元気もなく、気がつけばパジャマのまま夕方になっている。夫の帰りは遅く話す時間もなく、誰ともしゃべらない孤独に押しつぶされる毎日だった。あの頃に戻ることが出来ればすぐにここに来るのに」という声が聞かれた。同様の声は多くあった。産後鬱の経験談である。私自身もそうだったが、産院から自宅に戻ったその日から、一日中赤ちゃんの泣き声と戦い、睡眠不足で、うつろな日々は始まる。まだここに来ることが出来ていない人にこそ支援が必要なのだと考えた。

そこで産後、すぐに児童館に来やすいしくみが必要だと感じた。それには、産まれる前から児童館が赤ちゃんとお母さんの居場所であることを伝えて安心してもらわなければ、特に初産の産後鬱の人は救えない。

2017年度厚労省の調査でも、妊娠中の不安を解消するサービスで必要なものとして、「相談」や「外出サポート」等10項目の中で、「妊婦同士の交流」を必要と回答する妊婦の率は最も高い34.4%だった。

厚生労働省の児童館ガイドライン第四章にも

「児童館を切れ目のない地域の子育て支援の拠点として捉え、妊産婦の利用など幅広い保護者の子育て支援に努めること」と、妊産婦の支援を児童館の活動内容としているが、六甲道児童館では十分に組み合わせていなかった。

どうすれば、初産の妊産婦に児童館の存在を周知できるか、職員間で相談し、2017年に「プレママパパセミナー」を実施することにした。

内容を考える際に、児童館でセミナーをする目的と意義から考えた。

沐浴の仕方や、赤ちゃんの世話の仕方は産婦人科でもやっている。そこで、灘区に唯一、一ヶ所だけある助産院に相談することにした。出産前後の心と体のケアを、家族のように、丁寧に行っていられる先生に来ていただくことで、地域にはこんな温かい、困ったら助けてくれる場所があることを知らせる必要があると思ったのだ。先生に依頼すると、快く引き受けて下さった。次に当館に一番近い児童館にも声をかけて、灘区には10館児童館があることを一緒にアピールしてもらうようお願いし、協力してくれることになった。地域コーディネーターの方も来てくださることになった。地域の輪が、おなかに宿った新たな命を祝福していることを感じてもらい、児童館を含めた居場所があることを知らせるセミナーにしたかった。妊婦が求める妊婦同士の交流に加え、児童館内を見学してもらい「あかちゃんのおへやミニミニ版」をその時間に開催し、そこへの参加で、赤ちゃんに触れてもらったり、子育てママとの交流で、出産後のイメージを持ってもらえるような内容が、だんだんと固まった。

その際、広報手段が課題だった。初産だと児童館便りは見ない。近くの産婦人科に相談したが、当初はチラシ掲示でさえ難しかった。しかし、館長と2人で、直接話を聞いてもらい理解を得られた。また、妊婦歯科検診制度があるので、歯科医師会にも相談し、掲示物を送ることができた。

灘区役所にも相談し、一番目につきやすいエレベーターホール前の、子育てのチラシラック

に案内を入れてもらえることになった。区内全児童館にもチラシ掲示を依頼、初産の妊婦への声かけを呼びかけてもらった。また、民生委員さんにもお願いし、商店街や、地域の会館の掲示板にも掲示してもらった。初産の妊産婦を10組集めることを目標とし、9組の申し込みがあった。パパも3組、おばあちゃんも1組いた。

こうして「プレママパパセミナー」は地域の沢山の方の温かい協力を得て、成功を収め、2018年も実施し、参加者全員が、出産後、児童館に通ってくれる結果となり、保育園に入るまで来館され、入園後もお休みの日には顔を出してくれるようになった。

そして、当児童館だけではなく他の地域にも広がってほしいと「プレママパパセミナー」を実施してみませんか、他の児童館に呼びかけてみた。当児童館が灘区の東に位置することから、西にある児童館が手を挙げてくれ、連携してもらえることになり、私も当日は駆けつけた。しかし、初産の妊婦への広報はやはり難しく、1組参加にとどまった。妊婦にどのように周知するのが頭を悩ませる課題だった。

神戸市全区役所内設置が決定した「おやこふらっとひろば」

そんなとき、神戸市が全区役所に0から2歳親子（北区は5歳まで）の「おやこふらっとひろば」を設置する事が決まった（2019年）。しかも灘区は、その利用者が妊婦から2歳というくくりになっていた。妊婦の支援もできるというのは、「プレママパパセミナー」を開催してきた私たちには魅力的だった。

妊婦から赤ちゃんの居場所が区役所に出来れば、産後鬱の方も、そこから児童館に繋がることが出来る上に、過密の放課後児童クラブのため児童館を利用しにくい午後に、赤ちゃんの居場所が増えるのだ（現に2021年10月に緊急事態宣言終了後、児童館が乳幼児を受け入れだしてから、ふらっとひろばの予約は午後の枠から埋まるようになった）。

「おやこふらっとひろば」は外部への委託業

務となることを知り、私は、その運営に携わりたいと法人理事長に相談した。小型児童館では難しかったことも、区役所でハブ的な役割を担う姿勢で実現していきたいと訴えた。幸い、理事長をはじめ法人全体の理解と協力を得ることができ、申請書作成やプレゼン資料作成を行い、ありがたいことに灘区役所は私たちの提案を採用して下さり、運営委託を受けることができた。

「おやかふらっとひろば灘」のオープンを控え、苦労した初産の妊産婦へのアプローチも同じフロアの灘区担当部局と連携し、母子手帳に挟んだ招待カードを持って、ひろばに寄ってもらえるよう声掛けを依頼した。アメリカ発祥の、安産祈願イベント「ベビーシャワー」という、妊婦に祝福の気持ちをシャワーのように注ぎ、社会からの祝福を感じてもらう行事で、妊婦や、父親、祖母などを招き、花かんむりを付けて記念写真を撮ったり、ゲームをしたり、交流するプログラムを考案し、実施が決定した。

しかし、やっと準備も万端に整ったところで、世界各国でコロナ感染症が広がり、その対応に追われることになってしまったのだ。

押し寄せてきたコロナの波に悲痛な妊婦の声

感染リスクの高い妊婦の「おやかふらっとひろば灘」への入室はNGとなってしまった。しかし、妊婦から、コロナ禍で産婦人科に行くのも1人、出産の立ち合いも、父親教室もない。おめでたい事が何もない、孤独を感じる。だからベビーシャワーを、1組ずつでもやってもらえないかという問い合わせもあった。胸が痛むが、リスクを考え、いまだに（2021年11月現在）実現できていない。

「おやかふらっとひろば灘」自体は、当初予定の2か月遅れで、2021年6月に開所できた。0～2歳児親子が対象で、感染症対策として、1回につき6組の人数制限、1時間入替制、次の回までに30分消毒、換気、清掃、これを一日5回実施している。当初はコロナ禍の中、来てくれる人がいるのか不安があったが、実際には

毎日満員となった。なお、一時、緊急事態宣言中には閉所したこともあった。

SNSの活用でママの安心感と、負担の軽減

利用申し込み電話は鳴り止まないの、定員になった時点で、若い母親が使うInstagramにアップする事にした。何度も電話してもらうことを防げるとともに、ひろばの様子もアップし、安心感にも繋がり、1年で、フォロワー数だけで720人となった。

当初は、コロナ禍の中、果たして赤ちゃんを私たちスタッフが抱っこしていいのかという不安があった。もちろんマスク着用、消毒は腕から手指までこまめにやった。ところが不安はすぐに打ち破られた。「ぜひぜひ、抱っこしてやって下さい」と言わない人は、1人もいないのだ。お母さんたちは、よほど人との接触を待ち望んでいたと感じた。

そして、コロナ禍で初産の人は、外に出ることがなく、家で赤ちゃんとどう接していいかわからない、と泣いて訴えてくる方が多い。赤ちゃんへの接し方を伝えたり、皆で集まり、ふれあいあそびをしたり、ソーシャル・ディスタンスを取っていて、普通の絵本では見えないため大型絵本を多数購入し、読み聞かせをしたりしている。みなさん、その時間をとても楽しみにしてくださる。

また、大きな地図に、児童館・サークル・子育て支援施設を掲示して、それぞれの母親に、自宅に近い居場所を伝えている。各所のお便りも置き、出来るだけ手渡ししている。QRコードも載せているので、読み取られる方も多い。

コロナ禍で出来ないことと出来ることを見極める

現在妊産婦の来所はまだ厳しいが、今はそこに固執しても無理がある。

そこで、区役所で月に2回行われる4ヶ月健診に目をつけた。子ども保健係に相談し、マスク、フェイスシールド、消毒をまめにし、健診

終了後に、ひろばまで案内して中に入れてもらい、初回予約は事前に確実に取れる様にした。案内の間は安心安全に1、2組ずつ入室してもらった。一度足を踏み入れるということは大きく、4か月健診後の初めて利用は格段に増えた。産後すぐの母親とはいかなかったが、コロナのことも考えると、最良な展開であると感じる。

また、嬉しいことに、回を重ねるごとに保健師が、「ママ達からくつろげる場所が出来たと噂よ」と、ふらっとひろばの存在意義を理解してくれるようになり、私たちが健診終了後の出口にいと、「外に出た方がいい母親だから、お願いね」と、気になる母親の情報を伝えに来てくれるようになり、そうした方々の利用につながった。少しずつ子ども保健係や保健師との連携が、密になっていったことで、支援が必要な母親への対処がいち早く出来るようになっていった。

そして、人数制限、感染対策を確実に行ったうえで、皆が待ち望んでいる楽しいイベントを「おやこふらっとひろば灘」でも実施できるようになった（2020年9月から）。

保育所入所の人も考慮して、6ヶ月のハーフバースデーと、一歳のバースデーイベントを実施することにした。一歳のバースデーでは、伝統行事、一升餅担ぎを行った。一升のお餅はかわいい風呂敷で包んでリュックタイプにし、手作りした。ふらふらになりながら、はいはいや、よちよち歩こうとするが、すってんころりん転ぶこともある。すると、起き上がれなくて大泣きになる。みんなで「がんばれー」と手拍子を送る。

手遊びや、触れ合いあそび、紙芝居も行う。また、赤ちゃんの手形と写真を撮ってお誕生日色紙として、プレゼントしている。イベントは毎月満員で、父親や祖父母の参加も多い。ご縁を大切に、最後に集合写真を撮るときにはコロナ対策で、飛沫防止のため、大きな背の高いアルミ板を設置する。

そのときに最後に言うメッセージは、決めている。バースデーは、赤ちゃんにおめでとう、

だけではなく、1年間夜泣きの寝不足にも、ぐずぐずにも、離乳食の大変さにも負けず、ここまで無事にお子さんを育ててきたママパパのお祝いでもあります。お子さんはご家族にとって宝物ですが、私たち地域にとっても大切な宝物。これからも一緒に子育てしていきましょう。そして、子どもを授かった人生は、自分では知り合うことのなかった年齢差や、性格、考え方の違う人たちと、お子さんを通して出会い、ママパパ、そして、お子さんの人生を豊かにしてくれます。これが子育ての醍醐味でもあると思うので、是非出会いを大切にしてください。ここが、そんな出会いの場になればうれしいです。片手を自分の頭の上に置いて自分をヨシヨシ褒めてください。

すると涙ぐむ方も多い。この言葉は、児童館の「あかちゃんのおへや」でも、「プレママパパセミナー」でも必ず伝えていた。

コロナ前から大きな問題となっていた鬱をはじめとする精神疾患の深刻さは、コロナ後は計り知れない。今後の「WITHコロナ」時代、まずは、社会からの祝福「ベビーシャワー」を行い妊婦同士のつながりを作り、困る前から繋がり、産後すぐの駆け込み寺としての「おやこふらっとひろば灘」の存在を伝えていきたい。

おわりに 一日本版ネウボラへの道を行政と地域との連携で目指す

私は子育て支援とは、子育てをする親の育ちを支援することだと考えている。お母さんの幸福度世界一位のフィンランドでは、ネウボラと呼ばれる保健師が、妊娠がわかったときから母親と家族の担当者になる。ネウボラが「困る前から」母親と家族に繋がり、信頼関係を築くのだ。特に出産後1年はきめ細やかに子育てに寄り添う。何かあれば担当のネウボラに聞けば大丈夫という、ワンストップの子育て支援だ。日本でもネウボラの考えを取り入れた「子育て世代包括支援センター」設置を2017年度から自治体の努力義務とし、様々な取り組みも始まっている。

子育てには、一緒に迷い悩んでくれる家族以外の担当者が必要なのだ。児童館スタッフが「日本版ネウボラ」となれるように、今後も行政・地域と連携しながら協力体制を構築するとともに、活動展開を模索し、アウトリーチの視点を持ち続けて、進んでいきたい。

そのためにも「おやこふらっとひろば」が各区役所に設置されたことは大きい（現在6ヶ所）。区役所から母親の住む地域の児童館に繋ぎ、そこから様々な子育て支援施設、子育てサークル等へ繋ぐ道筋ができる。

また2か月に1回の区役所内子育て連絡会（区役所子ども保健係・まちづくり課・社会福祉協議会・大学連携子育て支援施設・子育て支援センター長・子育てコーディネーター）に筆者も参加できるようになった。現在はコロナ対応の情報交換だが、今後は具体的な連携を模索したい。

子育て支援・母親支援のためには、行政と子育てにかかわるすべての地域資源の繋がりが重要である。私たちNPO法人S-spaceは、神戸市立六甲道児童館の運営を行い、また幸いなことに「おやこふらっとひろば灘」の運営も行うことができるようになった。こうした立場を生かし「利用者中心の、切れ目ない子育て支援」を行政・地域との連携によって担わなければならない、重要な責任があると感じている。

乳幼児の子育ての悩みに、1つの正解や答えは無い。ただ、大変さを話し（放し）気持ちを分かりあい、少し癒される。私はそんな居場所がある事を、今後も一人でも多くの人にらせていきたい。

※参考文献

- ・高橋睦子『ネウボラ フィンランドの出産・子育て支援』（かもがわ出版、2015年12月）